

濱田隼雄『南方移民村』論

はじめに

濱田隼雄は一九〇九（明治四十二）年一月十六日に宮城県仙台市に生まれた。家は代々伊達藩の大番士であった。一九二五（大正十四）年七月から九月まで台湾旅行を行い、一九二六（大正十五）年四月に台北高等学校文科乙類に入学した。台湾で三年間の高校生活を送った後、一九二九（昭和四）年十月に台湾を離れて同年四月に東北帝国大学法文学部に入学し、国文学を専攻した。一九三〇（昭和五）年ごろから哲学に対する興味が生えて社会主義思想を持つようになった。学生運動・農民運動に没入し、一九三一（昭和六）年八月に豊里村などの貧農集落を歴訪した。一九三二（昭和七）年に東北帝国大学卒業後、一九三三（昭和八）年にまた台湾に渡り、同年五月に国語教師として台北静修高女に赴任した。一九三五年十一月に台南一高女に転任し、一九三七（昭和十二）年十一月に台北一高女の教諭となった。一九三八

黄 振 原

（昭和十三）年十月に入営した。一九三九（昭和十四）年十二月に召集解除後、西川満の勧めにより『文芸台湾』の同人となり、一九四一（昭和十六）年に『南方移民村』を『文芸台湾』に発表した。濱田は、『文芸台湾』（一九四二年五月号）に掲載された「メダカ」と題する随筆で、「去年の五月から『南方移民村』を書きつけて三月の二十日に一通り脱稿するまで、一日に四五枚は義務のように書かずにはゐられなかつた」と語っている。『南方移民村』は、序章、第二章、第三章、終章の四章から成り立っている。一九四一（昭和十六）年十月から『文芸台湾』に九回連載されたが、それは前半だけであった。後半を書下して一九四二（昭和十七）年七月二十五日に海洋文化社より初版刊行され、同年十一月月末、築地小劇場で劇団都座によって公演された。一九四三（昭和十八）年二月、台湾文学賞を受賞し、そして同年十二月に三版を重ねるとともに、松竹専属青春座により劇化され、再度上演された。⁽¹⁾ 社会的視野に立つリアリズムが濱田文学の特質の一つであると

いわれている。本稿では、濱田隼雄の最初の長編『南方移民村』に焦点を絞って、戦前の濱田の作品の特徴を考察することによって、埋もれている台湾における日本植民地文学としての濱田文学の一端を評価してみたいと思う。

一、『南方移民村』における濱田隼雄

濱田は一九四一（昭和十六）年の年末から一九四二年（昭和十七）年の年頭にかけて、台東庁関山郡鹿野村に入り取材していたが、前述のように、『南方移民村』は一九四一年五月から書かれたのである。菅原庸真は『南方移民村』について「と題する文章の中で、打木村治の談話として「この作品を書くまで作者は随分事実を調べた。むしろ調べすぎるくらいかもしれない」と述べているが、作品の内容に作りものもあるはずである。それにして、総督府特産課技師・田代豊の「小説『南方移民村』と移民政策」では、「鹿野村移民地の自然的条件は、確かに、荒涼落寞たるものであった。（中略）台東庁下の一等耕作地を、何故鹿野村移民に与へなかつたか。私は地方薄弱な、而も、高台乾燥地にして水利なき、鹿野村々落の、地勢的弱点を知悉するが故に、鹿野村移民の力と、自然的条件の不合理性を、敢て指摘し得ざるを得ないのである。（中略）資本主義経営は、移民村の指導原理を生産政策乃至は経済政策の上にも固定した、所謂、利益農業なるものを『モットー』として推進せられたが故に、生産の前提であるべき処の、移民村の生活が否定せられて、鹿野村の窮乏が現出

したと推断し得るのである」³と論じていることなどは、移民（蔗農）たちの生活苦、移民たちの運命に関する『南方移民村』の描写を裏付けるものといつてよいであろう。

日本人移民（蔗農）たちの不撓不屈の精神を作品に反映させようという濱田の創作意図が『南方移民村』には読みとれる。濱田は、連載の冒頭に「四十年もの永い間、台湾の大地に根を下して、人知れぬじみな建設の苦闘をつづけた」と付け加えて、日本人移民たちの粘り強さを読者に印象づけようとした。また、そこには日本の東北地方の農民運動の精神が受け継がれ、濱田は、『南方移民村』をかりて台東製糖会社の私設移民村の東北から来た蔗農の貧困な生活状況をも伝えようとしたことが明らかである。尾崎秀樹の『近代文学の傷痕』では、「植民地台湾における糖業資本と、甘蔗作農業の問題は、蔗農を中心とした農民運動の問題とともに浜田の学生時代からの関心を寄せていたテーマであった」と述べている。だが、『南方移民村』は、製糖会社と蔗農との間の葛藤を言及しているが、農民運動についての描写を控えている。例えば、一九三二（昭和七）年に移民村が青年訓練所を設置するための経費補助のことで会社側から誤解を招いた原因の一つとして、濱田は、『南方移民村』の中で「満洲事変は片づきつつあり、内地の社会主義運動も退陣の歩調をとりかけてあつたけれども、台湾では西部の甘蔗農民組合運動がまだ熾つて居り、今まで東部の方にはそんな気配がなかつただけに、ひよつとするとさういふ傾向が背景にあるのではないかと、危険視してゐるとも考へられた」

というふうに表現している。当時、「台湾に於ける農民運動は大體に於て、対製糖会社のもののみであった」⁽⁵⁾ことは確かである。この階級対立により起った農民運動は「大正十四年台中州二林の蔗農組合の設立を以て嚆矢とする、之は文化運動としての農村講座に端緒を置けるものであつて、遂に林本源製糖会社の甘蔗買取方法及び価格に関し争議を起」⁽⁶⁾すに至つた。会社側は国家の要求としての青年訓練所の設置に対しても消極的な態度をとつて経費補助を拒否したということについて、濱田は、そういう歴史的背景もあつたためか、経費補助を会社が断つた原因として、会社の不振などの問題に目を向けず、農民運動のこゝを取り上げた。濱田は、会社の移民側への不信、両者間の矛盾を提示するとともに、会社・移民（蔗農）間の複雑に絡まつた關係をそのことに投影したかたようである。それにしても、農民運動が東部に広がつていなかつたためであろうか、東部の鹿野村を舞台にした『南方移民村』は、農民運動の問題について、先の引用のほかには触れていない。むしろ、『南方移民村』は鹿田村（鹿野村）の移民生活の現実だけを直視して書かれた作品であることから、濱田は『農民魂』を描くという使命感に燃えていたことが感じとられる。濱田雄雄の「技師八田氏についての覚書」には、私が小説を初めてかきだした時、この台湾での人間生活、殊に内地人の生活に対して否定的であつた。美しさが発見できず、汚なき、嫌らしさがいつも眼の先にぶらさがつてきた。（中略）いつも内的な敵性分子に囲繞されてゐる暗い感じであつた。（中略）そしてやつとの

ことで、この台湾にも人間の美しい行為の数々があるのをみつけることができた。第一にこの島の僻隅に黙々と熱帯の土地をひらいてきた移民村の人々であつた。村の三十年の苦闘がむくいること極めて薄く、離村の問題が今尚あるとした時、私は憑かれたものゝやうに彼らのいきつゝけた姿をつた。小説としての形がとゞのはうがとゞのふまいが私は半年近くかきつゝけた⁽⁷⁾とある。この引用と照らし合せて見ると、濱田は、台湾在住の日本人殊に移民村の日本人農民の生きつづけた姿を題材として作品化し、彼らの生活の実態を指摘し、不慣れた移民地での生活の暗い部分に潜む問題を掘り下げるに止まらず、さらに、その人間としての美しき、尊さ、すなわち不屈な精神を発見しようとしたのである。風水害などの自然災害と闘つていながらその無力感が確かにあつたにもかかわらず、移民たちは難関を切り抜けようという精神力を持つていた。ということが『南方移民村』のモチーフとなつてゐる。濱田は「非文学的な感想」の中で、「私は『横丁之図』を自然主義的暴露小説の域を脱しないものと思ひ、そこからの私の更生を企てた。その結果が南方移民村であつた。私はこゝで、伝統的な日本農民の堅忍不拔の美しさを追ひ、苦難から彼らの呱呱と産み出した光りを描かうとした」⁽⁸⁾と述べてゐる。とはいへ、『南方移民村』全体の中ではほんの一部でしかないが、「鹿田村より遅くできた池野村の如きは、開設の翌年すでに半数以上が内地に引き上げてしまつた。早く身切りをつけたから、会社への借金がなく、身軽に退去できたのである。鹿山でも鹿田村でも、それ

に見^てふものがぼつぼつ出てきた。借金に縛られてゐるものだけが、どうにも動きがとれず、辛うじてふみとどまつてゐたのであつた」というように、その堅忍不拔という精神力があつた反面、『南方移民村』は定住の移民たちの「へ立ち往生」の実情をもリアルに描き出している。

また、移民（蔗農）たちの生活ぶりについて、『南方移民村』は、「何の張りもない生活だつた。昼は仕方がないやうに蔗園に出でいつたが、風害も水害も野猪の害もなくとも、決算のときにはやつぱり又借金が増えるんだと思ふと、細く長く、自分の頭よりも高く伸びてゆく甘蔗の茎が、かへつて怨めしくさへ思はれた。家にかへつても、庭先にコツコツと餌をあさる鶏も見えず、腹を空かして食欲にわく豚もゐなかつた。郷里でやつてきた百姓の生活とは、何といふ違ひだらう。愉しみは、ただ強い酒で、ごもごもした不安な頼りない気持を忘れることだけだつたのである」と点描し、また、「会社のやり方は不親切だし、指導員は熱心でないし、なんぼ稼いでも借金は増える一方、いつになつたら自作になれるやらわかつたもんでない、お先まつくらなくらしをしてゐる、そこでつい酒呑んでしまふ」という表現を使っている。移民たちが自暴自棄な「自棄酒」に身を任せたことを描写することによつて、濱田は、移民たちが肉体的疲れ、精神的疲ればかりを現していたことを浮き彫りにしていると同時に、会社と移民たちとの違和についての問題をも提起している。

移民村の村人と会社との対立関係が存在していたはずであるが、

濱田隼雄『南方移民村』論

村人による抗争がなかつたためか、そして反発も弱かつたためか、濱田は、階級闘争そのものを描いておらず、公医の珪介や指導員の国分を登場させ、村人と協力して難局の打開をはかるという手法で、村人の奮闘ぶりや、会社の蔗農への無関心・冷たさを物語っている。と同時に、「ヘインテリの強さ」ということが示されている。ある意味では、濱田は、「農民魂」はやはり農民でないインテリ等の支えの上においてこそ構築されることを示唆しているといえよう。物語全体の構成からすると、『南方移民村』は、ヘインテリ、〈善意の人びと〉、〈高齢で徳望のある人〉を中心に小説を展開している。濱田は、序章と第二章では、移民村によつて大切な存在であつた人物として、珪介という医者、国分という指導員、石本という巡査を配置しているが、三人とも移民側の人物ではなかつた。といつても、濱田は、移民村の建設時代において、移民村の「改革」に重大な役割を演じていた〈善良な誠実家〉の三人に、肯定できるような価値を付与している。小説の後半に入ると、嵐のために「国分が不慮の死をとげてから、このトリオの主要性は次第に力を失ひ、代つて今度は所謂移民の側に人物が移行していく。この人達によつて土への情熱をとり戻したかに見える嘉兵爺や、更に市治とか弥太郎とか嘉久治達の青年層へ作者の力が籠つて行くのである」と竹村猛が論じている。『南方移民村』の後半では、弥太郎などの青年たちが移民村のために積極的に奉仕したということも多く描き、濱田は、村の「活力」を示す一方、〈世代交代〉をも強調したかつたようである。しかし、「国分の死

は（中略）村の蘇生のための犠牲であつた。（中略）嘉兵爺は急に老いて沈黙に落ち、青年は未だ巢を離れず導く手を求めてゐる。志を継ぐものは今や珪介自身でしかあり得なかつた。珪介はやうやく現在の彼の責任を知つた。（中略）彼は或夜思ひ立つて嘉兵爺の家を訪れた」というように、珪介は、小説の後半においても、禁酒同盟の結成、託児所の設立、青年訓練所の設置、野獸防禦柵の工事、水田の獲得運動、鹿田圳の復旧工事などの中で依然として重要な地位を占め、奉公の精神に基づいて移民村に貢献した。

この点から見れば、移民たちの辛苦艱難だけではなく、指導者側のインテリと移民側の老農がどのように移民村の存続や移民たちの生活改善に努めていたのかも射程にいれて、濱田は物語の主な筋を進めている。このように、インテリであつた濱田は、『南方移民村』に自分の抱負をも織り込んでいと考えられる。換言すれば、東北地方の農民運動に没入したことがあつた濱田は、移民村の庶農たちを生活の疲れから解放しようという自分の理想を、『南方移民村』に登場したインテリなどを通して代弁しようとする意味合いが強い。

濱田は『南方移民村』の序章で、台東製糖株式会社の経営難について、「彼らが大船と思つて頼つた会社自体が、決して大船ではなかつたのだ。もともと立地条件の不利を無視して設立された会社である。工場の操業開始までに鉄道や移民村開設に多額の資本を固定させてしまつたのが、何と云つても大きな失敗であつた。それに、栽培してゐた原料の甘蔗が在来の小茎種であり、従つて

砂糖になる歩留がとても悪かつた。（中略）しかも移民村の建設は莫大な金を喰うものであつた。現に総督府の産業政策の上で、内地移民を招来するか否かが真剣に考究され、招来するにしても、東部の局限された地方に、それも総督府の官営でなければならぬ。でなければ、経営不可能であろう、といふ悲観的な意見が多かつた」としたうえで、さらに、「唯一の頼りにした会社がこの弱体なのだから、移民たちが如何に苦難の路を歩かねばならなかつたかは容易に想像される」などと分析している。だが、『南方移民村』では、熱帯地・台湾における日本移民社会の現実、移民の悪戦苦闘の様子についての説明に比して、濱田は、利益農業の問題、製糖会社の経営環境などを極端に少なく語っている。なお、現実の問題として総督府の内地農民移植政策と、製糖会社の移民政策との制度組織の欠陥を論じておらず、濱田は、風土病や、風水害、病虫害、野猪の害を強調しすぎると指摘しておきたい。台湾の自然災害だけが日本移民の苦難の種であつたとはいえないはずである。移民事業失敗の原因について、『帝国主義下の台湾』の矢内原忠雄は、「台湾殊に東部台湾に於ける製糖会社対蔗作農民関係の本質が寧ろ農業労働者雇傭関係に近く、甘蔗買取価格は往々農民の生計を維持するに困難なるほどに低く定めらるゝことを知り、一方移住者が衛生設備の欠陥により風土病に悩み、（中略）台東製糖会社の如きも移民に対し甘蔗耕作を強制し、水利を考慮に置かず、農家自家消費食糧は総て会社購買部を通じて甘蔗代金を以て購入生活せしめ、専ら甘蔗本位に農家経営を制限せしめたる為

移住者の家計は窮乏の上に負債を積み、遂に退所離散するに至つたのである⁽¹⁰⁾としてゐる。濱田は、会社の経営方針や移民計画・政策などの問題を更に深く探究せず、風土病や風水害との闘いにスポットライトを当てて悪条件下の移民の姿をとらえ、その精神力を強調しようとしただけに、何だか物足りない点が残るのである。

二、「南方移民村」と国策の影

『南方移民村』は政治に歪められた移民政策を批判しようともせず、そのうえ国策に迎合したという面もある。

一九四一（昭和十六）年一月、濱田は、「二千六百一年の春台湾文芸の新体制に寄せて」（『台湾日日新報』）と題する文章で、「政治に文化性を持たせねばならぬと云はれる反面、文化には政治性を、との要求がある、そしてここから、台湾文芸運動の政治的意義について、当然考へられなければならないが、この意義を認識して、作品行動の上にも実践するのは、かなりの困難がある」と述べている。しかしながら、「内地の農民がこの土地に根をはやすのが本当に台湾を領有することだと思ふんです」（傍線は筆者、以下同様）、「日本の農をこままで持ち込む、それが国威の発展ともいふべきだ」などの政治的な意味がある表現を、濱田が『南方移民村』という作品の世界に持ち込んだことは事実である。一八九八（明治三十一年）年に兄玉源太郎が台湾総督に就任して以来、経済開発は植民地政策の重要な部分をなしており、もつとも特徴的なのは産糖政策であり、総督府は糖業の発展に力を注

いだ。それに伴つて日本の農民が台湾に移住した。また、総督府は、一九一七（大正六）年に私営移民奨励規則を定め、一九一七（大正六）年度乃至一九二〇（大正九）年度十五万一千円を台東製糖会社に補助した⁽¹¹⁾。「総督府は内地農民移植の必要をば本島統治上、熱帯地へ向かつての民族的發展上、内地人口過剰の調節上、及び国防並びに同化上の四点より説明した⁽¹²⁾」。しかし、日本農民移植政策の意義について、矢内原忠雄は、「こゝに於てか純然たる資本家的植民政策は原住民の民族的自覚によりて脅威を受くるが故に、これに移住的植民政策を加味して日本人の民族的勢力を植ゑ付け、以て消極的に本島人の民族自立の憂を防ぐの手段と爲し、（中略）要するに移民の政治的意義を最も重要視したのである⁽¹³⁾」と指摘している。これによつて、日本農民移植政策と植民地統治政策との絆の深さが分かる。移民政策の特殊性は政治的な意義に規定されている。『南方移民村』は、総督府の甘蔗農業移民政策などの政治的背景、移民の悲劇の種になった政治的要因について全く触れていないが、先に挙げた引用——「台湾を領有する……」⁽¹⁴⁾「国威の發展……」の文字通りに、やはり、植民地へ耕地を持たぬ貧農を送り込むという「国策」に流されたところもある。

『南方移民村』の第三章の前半まで読んでみると、移民村の社会は閉鎖的であつたと感じられる。濱田は「移民村を、高山族や台湾人集落と没交渉な位置にすえ⁽¹⁴⁾」たのみならず、移民村と時代を切り離して書いてきた。だが、第三章の後半にきて、濱田が移

民村をとらえる視点は時代の息吹の上にも及んでいる。「満州事変」「青年訓練所」「突撃精神」など、時局に関わる言葉ばかりが目につく。例をあげてみると、次のとおりである。

● 昭和五年六年は、またたく間に過ぎた。満州事変といふ大きな国家的進展も、郷里からの消息で、誰の息子が戦死したさうなと聞けば身近に感じられるだけで、杳かに遠いものやうであつた。

● 兵隊といふと、この暮には弥太郎も市治もゆくんだね。

● 嘉久治の入営

● 弥太郎、市治の除隊帰郷

● 今年は間もなく満州国が建国されるといひますし、村も何とか目鼻がついて、結構なお正月ですなあ。

● 満州事変を契機として全国的に青年訓練所設置の趨勢が起り、この村にも是非作るやうにとの庁からの指令があつた。

● 在郷軍人の突撃精神

● 帰り途には、「万葉の桜か、襟の色……」と軍歌を歌ひ、

● 夜小学校の校庭では新しく買った防具をつけた若いものが、嘉久治たちの「前、前、後、前、前、前、突けえ。」といふ号令で、やあつ、といきましく木銃を突き出してゐた。

満州事変勃発後の村の状況を描いたのである。戦争の影響が移民村にも押し寄せて来たことは、この章から強く伝わってくる。移民村も出征兵士が出てきたために農業労働力の不足があつたことが推断できる。だが、この出征による労力不足についての記述は

あまり見られない。これに対して、青年訓練所をめぐること、特に訓練所の教練ということ、濱田は積極的に描いた。労力ということよりも、軍事訓練の方に濱田は目を向けたのである。それは時局の反映でもあろう。一九三二（昭和七）年三月、満州国が建国を宣言し、日本では同年九月から在郷軍人の募集が開始され、在郷軍人による武装農民は北滿に定着させられた。そして、一九三三（昭和八）年三月、日本は国際連盟に脱退を通告して国際的に孤立するようになり、大きな事件の起きた時代であつた。一九三二年から、つくられた「爆弾三勇士」という軍国美談が日本のみならず台湾でも広まっており、「軍人精神」がより宣揚された時代でもあつた。第三章の後半から、濱田は、物語にこのような時代の息吹を加味する上に、村人の日常生活を在郷軍人の突撃精神と結び付け、〈非常時〉の移民村を描いている。自然災害と闘つた生活から戦争の影に覆われた生活へと、濱田は、「隣保共助の精神」や「不屈な精神」を称揚するのみならず、国のために力を尽くしたい日本人移民たちの姿をも強調しようとしたことがうかがわれる。

小説の終章においても、濱田は時代に対応して物語を展開する。しかし、『南方移民村』の広告コピーでは、「筋の破綻としては『終章』の部分の安易な解決以外にはないやうである」と書かれているように、濱田は、政治情勢の波に押されたためか、安易に小説を終わらせることになつた。このことについて、「『南方移民村』について」の菅原庸真は、「終章にきて作者は大東亜戦争

の勃発に遭つて、この作品の結着に相当苦悶したことを感じさせ
る。その結果として、作中人物の幾人かを支那事変に出征させ戦
死させ、帰還させた。そこへ大東亞戦争をもつて、鹿田村の悪条
件と闘ふのをやめて遠く南方へ新移住地を求めさせて作品を終わ
つてゐる」としたうえで、さらに、「私はこれに対して、作者の
文学者としての時局に対処する心構へを判然とさせたことはいい
としても、これにより万が一作者が安易に俗氣を出したと見られ
ることを非常に心配してゐる。私は最初から折角感じてきた切迫
感をそのことにより裏切られた感じて残念でならなかつた」と、
述べている。濱田は、一九四〇（昭和十五年）年、「公園の囃」と
題する小説を書き改めたことがあつた。「掲載に至らない前に國
民生活の体制がすつかり變つて後半の部分があまりにも情勢にそ
ぐはずとても発表出来なくなつた」というわけであつた。このこ
とから考へると、一九四〇年からの段階に限つて言へば、濱田は
確かに政治情勢に対処して小説を書く心構へを持っていたことが
推察される。だが、「作者が安易に俗氣を出した」といわれても、
それは、時代の制約の下で不可避的な欠陥が生じるのであらうと
受け止めてよいであらう。

終章は戦時色が濃い。一九三七（昭和十二）年七月の日中戦争
を契機として、軍需産業に大きく偏倚した台湾の工業化が積極的
に促進されるに伴つて、工場に投じた農村の人達が増えてきた。

出征ということのほか、その工業化は鹿田村にも波紋を投げか
けたようである。『南方移民村』では、「嫁の来手がなくなつた鹿

田でも、見限りをつけて工場に投ずるものが一軒二軒とつづいて、
もう五家族が出て行つてゐた」とあり、また、戦争及び工業化は
移民村の人びとにとつて犠牲が負担か、とにかく、「働きざかり
の中堅層が村を離れて戦ひの第一線に立」つたとも記されている。
移民村では、「出征家族に心配させねえやうにと、みんな気い合
せて仕事は手伝ふし、小学校でも忙しい時あ勉強やめてまで奉仕
作業して呉れてつから、どの家でも畑減らしたりはしねえである
がせめてものこつたども、不作はつづく、何つつても手不足は祟
つてなあ」というようになった。戦争中の村人の生活上の苦しみ
や、齒をくいしばつて生きていた移民たちを濱田は描いた。一九
四一（昭和十六）年十二月八日に太平洋戦争が始まり、防衛団は
移民村にも原住民集落にも台湾人集落にも組織されていた。戦争
中の移民村のありさまを書きながら、濱田は、軍の敢闘や國家の
敢行を伝える姿勢をとつた。『南方移民村』では、「日の丸の旗はど
こまで進むのか。弥太郎は計り知れぬ進行の鋭さと激しさに驚
嘆した。しかも自分のやうな在郷軍人は、待つ二度目のお召をま
だ受けてゐないのである。彼には、この大戦争を敢行した國家の力
がひしひしと身に迫つて感じられるのであつた」とある。結局、濱
田は文学には政治性を持たせねばならないということを遂行した。
時局を反映するほかに、濱田は國策に協力的な姿勢をも示すか、
終章に日本の〈南進國策〉の影も落としてゐる。「折角台湾さ渡
つてきて、親爺の代の苦勞はまんた当り前だとしても、子供どもの
代まで引きつづいてはなあ、それでは子供に濟まねえ」、など

といった嘉兵爺の弥太郎への説教を通して、終章では、へ移住が村を救う道である」ということが問題として取り上げられた。濱田は、へ移民村のさらに南方への移住」をこの長編の結末とした。しかし、弥太郎の思い付きであるが、「大詔を奉戴した戦時議會で闡明された大東亜共榮圏の構想は、具体的に日本帝国の、国民の進路を明らかにした。何と広大な海と陸と山とをそれは持つてゐたことか、何と豊富な各種資源をそれは包蔵してゐたか。そして何と多くの指導すべき東亜の民族を擁護してゐたことか。しかもそこには組織的な、計画的な、日本民族の進出が、慎重を極めて着着と無理なく準備されてゐる」と、濱田は書いてゐる。これによつて、そのへ南方への移住」は、単にへ村（子供）を救うため」に止まらないことが明らかになる。尾崎秀樹は、「嘉兵爺に移住案を打ちあげられた青年は、これまでの苦難に満ちた体験——暑さに耐える肉体と、甘蔗農業の技術を、南方の占領地域の『アジア新建設』に役立てることを思い付く。この結末はいかにもとつてつけたよう değildir」と論じてゐる。当時の政治情勢に目を向けると、小林躋造が一九三六（昭和十一年）九月に台湾総督に就任して以来、皇民化、台湾産業の工業化とともに、台湾を南進（東南アジア進出）基地とすることを台湾統治の基本政策として鼓吹した。同年十一月、南進の準備として勅令により「台湾拓殖株式会社」が設立された。日本でも一九四〇（昭和十五年）年七月に武力行使を含む南進政策が決定された。一九四一年十二月に太平洋戦争に突入して、日本ではへ大東亜共榮圏」実現の気運

が高まる一方であつた。小説の「とつてつけたよう değildir」結末、つまり、へ移民村の南進論」は濱田の文学者としての時代感覚ひいては帝国の「国力建設」への使命感であつたともいへよう。とはいふものの、濱田が移民村の運命を帝国の「南方圏建設工作」の渦中に巻き込むことについては、やや行き過ぎた感がある。

三、「南方移民村」に描かれた台湾人

医師であつた珪介は、鹿田村に移住する前、「内地人といつては役所や公学校や小さい製糖会社の工場員だけで、本島人が大多数の」町に住んでゐた。マラリヤの「注射薬を造り上げるのに成功した」。「名医の評判が広がつた」。しかし、台湾人医者たちから、悪声を放たれたり、悪口を叩かれたりしたが故に、移民村（大正四年）ができた六年後、珪介は町を離れて村の公医として鹿田に転居させられた。というように、「南方移民村」の序章においては、濱田は、へ台湾人医者からの中傷や排斥」を珪介が移民村へ行く直接の原因とし、へ日本人が少ない町での台湾人医者への日本人医者への排斥」ということを取りあげて描いたのである。事実か作り話かは別として、濱田は役人や会社員でない日本人の植民地での生活の難しさを強調しようとしたのであると、筆者はそう考へる。だが、植民地時代の台湾においては、へ内台人融和・親和」といふスローガンが掲げられており、「南方移民村」のよりに、支配層が被支配層に排斥されたことを描いては両民族間に隙を生じるおそれがあるのではないかというよな配慮は、濱田

に行き届いていなかったようである。なお、当時、台湾人の総督府体制及び日本人軍人・役人への批判があったが、日本人医者への排斥そのものがあつたかどうかについては、疑問の余地がある。

一方、『南方移民村』には、「銃器引上げこそは当時の理蕃の最大根本事であり、最も困難な事業である。今でこそ彼らは名も高砂族と改められ、山奥から平地に移住して、山野一郎、浦井太郎などと日本式に改姓名したばかりでなく、カーキ色の青年団服をまとひ疊を敷いた改良家屋に、志願兵となることを憧れてゐるが、その頃はまだ強い野性を棄てず、山中に獸を追つてゐた」という挿話があつたり、原住民集落の改良家屋の周囲には、「蜜柑や檳榔が程よく植あられて、(中略)改良豚舎に(中略)豚がまるまると肥つて、(中略)その傍に内地の田舎にもないやうな便所が小ぢんまりと立つてゐる。(中略)その上一軒毎に家庭防空壕は掘つてあつたし、部落の中には石油発動機を備へた精米工場も一棟新築してあつた」という挿話があることから、濱田は総督府の「理蕃八蕃人ヲ強化シソノ生活ノ安定ヲ図リ一視同仁ノ聖徳ニ浴セシムルヲ目的トス」という理蕃政策の奏功を裏書すると同時に、原住民集落が移民村と対照的であつたことを取り上げて移民村の貧しさを強調しようとした意図がうかがえる。さらに、西部の台湾人農民について、「本島人の百姓はしあはせだなや」とまで書いている。濱田は、水田の所有や、蔗作の進歩、嘉南大圳の水利工事を理由として、西部の台湾人農民が東部の移民村の日本人農民より良いと考えたようである。濱田は、「技師八田氏について

の覚書」でこう述べている。「『南方移民村』を」かきつゞけながら、私は更に、従来農民搾取の機関としてしかかんがへられなかつたこの島の糖業資本が、島民への文化を注入した面についてすつかりわすれられてゐることをおもひ、それから十五万甲歩にわたる灌漑を完成し、独特の三年輪作制を敢行した嘉南大圳の、建設の当初は土地収容や水租の問題で農民の反感をかひながら、今にしてはそのあたへた福祉の歴然と大きいことにおもひひたり、このやうな大きな建設の美しさを、ひきつゞいて書くことができると、ひそかにはゝえんでゐた。濱田が台湾人農民を描く視点は、この記述からとらえることができよう。濱田の視点は日本の台湾での農業振興の成果だけに止まつてゐる。農民の犠牲、たとえば、植民地政策を背景にした製糖会社の台湾人蔗農への搾取を、濱田は問題視していなかつたようである。

おわりに

関山郡鹿野村(鹿田村)は一九四四(昭和十九)年、台東製糖が明糖に合併されるとともに、台東郡旭村に移転されることになつた。濱田の〈移民村南進論〉の願望を裏切つた。なお、戦後もない頃の、濱田の小説「木刻画」の中で、中国人の木刻画家・黄栄燦の、「君は最初の小説では台湾の内地人の生活に対して批判的であり否定的であり、正しいリアリズムの立場をとつたのに、次第に反動化して戦争に協力した、と聞か、それを自分が認めるか、そしてそれはどんな理由であつたか」という質問に対して、

濱田は、「戦争にひきずりこまれ、己の世界観を曲げたのは私であつた」「恥しく思う。戦争に捕えられて作家精神を失つた一人であつた」⁽²⁾と、反省を表明した。

『南方移民村』の特徴として、日本人移民たちの開拓精神の描写、奉仕精神の強調、国策の迎合、東北方言の使用、という四点を指摘したい。また、「作者三十二歳、太平洋戦争突入の不幸な時期に書かれたこの大作は、結末の部分において時局迎合の色を帯びるといふキズを残した」⁽²⁾た。濱田はリアリズムの立場に立って『南方移民村』を書いたが、国策を反映して移民たちの生き方を「建設的努力」、登場人物の「奉仕精神・滅私奉公精神」、戦時下での「祖国への愛・執着」を表現した点からすれば前向きな「建設的な」性格を持つ文学として評価することができよう。しかし、そのような「努力」「精神」「愛」は、日本による台湾統治を積極的に推進するものであり、この作品がそれを後押しするものとなつてしまつたこともまた否定できないのである。

注

- (1) 『濱田隼雄年譜』明窓社、一九八四年九月を参照。
 (2) 菅原庸真「『南方移民村』について」『文芸台湾』一九四二年九月を参照。
 (3) 田代豊「小説『南方移民村』と移民政策」『台湾時報』一九四二年十一月。
 (4) 尾崎秀樹『近代文学の傷痕』岩波書店、一九九一年六月、一五三

頁。

(5) 平山勲「台湾に於ける農民運動の展望」『台湾』一九三五年五月。
 (6) 前掲「台湾に於ける農民運動の展望」。

(7) 濱田隼雄「技師八田氏についての覚書」『文芸台湾』一九四二年九月。

(8) 濱田隼雄「非文学的な感想」『台湾時報』一九四三年四月。

(9) 竹村猛「『南方移民村』近傍」『文芸台湾』一九四二年十月。

(10) 矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」岩波書店、一九八八年、一三八頁。

(11) 前掲「帝国主義下の台湾」一三八頁を参照。

(12) 前掲「帝国主義下の台湾」一三九頁。

(13) 前掲「帝国主義下の台湾」一三九頁～一四〇頁。

(14) 前掲「近代文学の傷痕」一五三頁。

(15) 『文芸台湾』一九四二年十一月。

(16) 前掲「『南方移民村』について」。

(17) 濱田隼雄「公園の図」『文芸台湾』一九四〇年三月、付記を参照。

(18) 前掲「近代文学の傷痕」一五二頁。

(19) 前掲「近代文学の傷痕」一五二頁。

(20) 川崎寛康「台湾の文化に関する覚書(二)」『台湾時報』一九三六年一月。

(21) 濱田隼雄「木刻画」『展』第三号、明窓社、一九八二年十月。

(22) 渡辺正三郎「濱田隼雄ノート」『展』第三号、明窓社、一九八二年。

(フアン・ツインイェン 本学大学院博士課程)